和田塚くんの純愛ロード

昼寝猫・

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品の登場人物は全て１８才以上です。

稲村学園に引っ越してきて三ヶ月。彼は、稲村学園の一年生となった。長谷家などの良いご近所さんにも恵まれ、程々に平穏な生活をしていた和田塚真。彼はある晩を転機に、湘南の覇権をめぐるヤンキーの闘争に巻き込まれて・・・え？生活態度は真面目だから、警察に目を着けられずに喧嘩出来るから都合がいい？最近知ったけど、江乃死魔のトップが警察にコネあるし無茶出来るから好都合？第一面割れてないって？

・・・・・三大天の揃った湘南に平穏は無い！さらに、夜な夜な現れる謎のライダーによって湘南の夜は混沌の渦へと叩き込まれる！

和田塚真によって引き起こされる、湘南痛快娯楽暴力系不良恋愛活劇！目をよく開けて御覧じろ！

ハーレムを予定していますが、姉と辻堂さん（悩み中）は多分大との予定です。真琴さんの寝取りは、苦渋の決断でしたが無しです。

主人公は割と外道。原作のコメディ成分は、もちろん取り入れるのでバイオレンス部分とコメディ部分の被ダメージが大きく違っていいるのは、スルーしてください。

アンチ・ヘイトについて

一応原作でも江乃死魔アンチ要素があるので、その範囲内で（カツアゲウザとか日寄って群れる弱者）アンチします。

あと九鬼家のキャラは好きだけど、団体としての囲い込み戦略等は嫌いなのでそこのところ厳しめです。まあでも、個人的に力ある分好き勝手できるのは当然（感情的に、認められるかは別として）だと思いますし。

一応九鬼キャラは出てきませんが、個人的ではない敵対関係にあります。

特に誰もひどい目に合う予定はありません。

目次

夏の始まり ―― 1
和田塚真という男
朝の風景 ―― 15
昼の出来事 ―― 32
放課後 ―― 49
ある日の出来事　I ―― 60

夏の始まり

湘南の夏が平穏に過ぎたことはない。

ビイイイと静かな音を響かせながら、日が落ちて暗くなった１３４号線沿いのカレー屋近くに一台のバイクが停車した。

カーキと黒で構成されているそのモタードは、前後ライト周りにはスチールパイプのバンパーがあり、フットペダルの前にも大きな鉄製のプロテクターが付いている。チェーン周りやバッテリー周りもカバーが増設されており、機械部分の徹底的な防御措置がなされている。

荷台も専用に増設されており、外見はさながら陸上自衛隊の偵察バイクといった外観をしているが、車体横にはＫＬＸではなくＺｅｒｏＤＳと黒字でプリントされている。

そのバイクの運転手は留め具を外して、０―２１と大きく書かれたコヨーテタンカラーのヘルメットを脱ぐとジャケットの前を開け、口元までカバーしていたネックウォーマーをずらして一息ついた。

精悍な顔つきだがまだ若く見える、少年から青年へと移り変わる途中といったさまだ。

「ふいい、ようやっと帰り着いたぜ湘南。やっぱ１６号と１２９号伝って延々と降りてくるのは面倒だな・・・途中寄った八王子駅で一停見逃しで二点取られたし。トホホ、親父に一発くらい殴られるな・・・」

埼玉の上の方を経由して長距離を運転してきたらしく、少し疲れた表情をしている。体格は良いが、流石に長距離運転と原点のダブルパンチには辟易したように見える。

「そもそも日本の駅付近って、後先考えずに建て増ししまくるからごみごみしすぎなんだよ!!説教食らって、郵便局探して、罰金払ってたらもう九時過ぎじゃねえかよ!」

クソッ、地図確認で停車してなければ撒いてやったのに、などと物騒な事をつぶやきながら、腕のアームカバーのようなシースルーのＰＤＦ入れに入った携帯のナビを切っている。どうやらこれと、片耳につけた無線イヤホンで道を確認しながら高速を下ってきたようだ。

「流石にバッテリーも３０％切ったか・・・オール電化のバイクってのははじめての試みだけど、いいよな・・・この国は電気が財産っていう考えが呆れるほど退化してるから、電気窃盗の現行犯でタイーホなんてポリ公でもやらねえ・・・だから、燃料ほぼただだしウハウハだな・・・最初は振動無いし、エンジン音しないのがどうかと思ったけど・・・中々どうして」

ゲスイ顔でゲスイ事をのたまうこの少年は、どうやらいわゆる不良のレッテルを貼られている人種のようだ。

携帯でバイクのバッテリー残量を見ながら、メットを荷台に置きカバンからペットボトルと□ーンソのグリルチキンを取り出すと、小休止を取り始めた。

「・・・そろそろ夏だっつのに暗くなるとまだまだバイクは寒いな～、これで雨でも降られた日には風邪確定だな。ＡＴＶならルーフ付けられるけど、高速乗れねえしなー・・・」

天気予報通りで良かった、グリルチキンうめ～などと言っている少年は、白のＶネックに黒色のフライトジャケット、紺のジーンズの上にニーパッドを着けている。靴はタ

ンカラーのコンバットブーツ。
手袋はM―ｐａｃｔを左手は赤色のオープンフィンガー、右手に黒色のフルカバーのものを着けて携帯やメットの留め具を操作しやすく工夫している。利き手の右手だと咄嗟に手をついてしまい、オープンフィンガーだと怪我をしてしまうため、左手をオープンフィンガーにしているというのが味噌だ。
また荷台のダッフルバッグの他に、ジャケットの中にはウェアラブルなセカンドバッグを着けていて、長距離でもかなり余裕のある運転が出来るようになっている。
がしかし、バッグ類やジャケットは防水加工がされているが下半身はそういうわけにはいかず、少年の言うとおり雨が降っていたならば相当悲惨なことになっていただろう。
もっとも、雨が降らずとも今日は悲惨な目に会うのではあるが。

「ヒャッハー!!!」
「来たぜ湘南んんんん!!!!!!!!!」
「きゃっ！」

「うわ、なんだ!?」
「あ・・・私の、肉まん・・・」
「ん?」

後ろから改造マフラーの悪趣味な音を鳴り響かせながら、よからずが金属バットを振り回している。道を歩いていた人たちも被害を受け、制服を着ていた少女は肉まんをたたき落とされた。

ひでえことしやがると、思いながらも少年は他人事であった。バイクは道路から少し離れていたし、相手もバイク乗り。バイク乗りならバイクに酷いことをしようとは思わないだろう、安易にも少年はそう思ったのだ・・・その甘い考えを、すぐに後悔することになるとも知らずに・・・。

そのまま食べかけの肉を食べようとした瞬間、その危険を察知して少年は可能な限り低くダッキングした。

その動きは、見る者が見ればそれだけで目を見張るような見事な「沈み」の動作であり、鉄パイプで殴りかかろうとした男も、少しバランスを崩してよろけながらバイクは走っていった。

「ふー、やれやれ。見境なしかよ・・・よろけてからのリカバーは出来てたし乗り手はまあまあだが、ケツの野郎は走り屋じゃなくてクズの方だったか」

少年は、吐き捨てるようにそうつぶやいた。

後ろからもう一台来ていたはずだ、と警戒してバイクから降りると、案の定もう一台金属バットを振り回しながらこっちに近づいてきていた。

いっそぶん殴ってやろうか、と待ち構えたその瞬間にそれは起こった。

歩道の段差によろけたバイクが、少年の近くを通るコースを外れてしまったのだ。

「っちー!だが調子のんじゃねえ・・・よっ!!」

「あ」

ガンッ!ガッ、ゴッ、ズザザ・・・

何をどう調子にのるのだかはわからないが、バイクの後ろに乗って金属バットを振り

回していた男が、ギリギリ届いた荷台に乗っていたヘルメットを金属バットでぶっ叩いたのだ。

「ひゃっはー！ホームランだぜぇえ!!」

「さっすがタケチャン!!ざまーみろインポ野郎!!」

「あ、あ、あああああああ!!!!??俺のメットおおおお!!!!!!」

イタリアのフライトヘルメットを元々作っていた、ＯＳＢＥ社がバイクヘルメットを手がけた一品であり、その形、追加オプションのマスク、どれをとっても最高にかっこいいヘルメット。

その最高にかっこいい割に、お値段リーズナブルなヘルメットは、時速６０キロの速度から振り回された金属バットによって、路面に叩きつけられ無残な姿を晒していた。

フルフェイスではないことから、日本の安全推奨基準を満たしていないヘルメットで

はあるが、十二分に強度を保持している。その頑丈さは痛撃な一撃を食らったにもかかわらず、内側まで壊滅的なダメージを受けていなかった事ことからも見てとることができる。

「あ・・・あ・・・」

少年は、よたつくように飛んでいったオプション付き六万円相当の「まあチョット高かったがＳｈ○ｅｉ程でもないし、満足のいったお気に入りヘルメット」、の元に近づくと崩れるように膝をついた。

そのまま数秒ばかり俯いて呆然としていたが、偶然、同じタイミングで後ろにいた肉まんを叩き落とされた女学生とわなわなと肩から震え出し、同じ言葉を呟いた。

いわく

「・・・殺す」

そうつぶやくと、その女学生は走り出し、もう片方はダッフルバッグから予備のジェットヘルメットを取り出しネックウォーマーで鼻まで隠しジャケットの前を閉め

てバイクを始動させた。
　少年が少しバイクを進めると、目の前には１００近い人間が道を通せんぼしており、先程の族達がその前で立ち往生していた。

「喧嘩か?なら都合がいい・・・始まる前にヤる」

　先に走り出していた女学生を追い越し、不幸なことに下車している「目標」から１０メートルほど手前で停車する。通せんぼしていた不良達も、流石にこの状況で急に謎のライダーが出てきたことに驚き、ざわめきが起こる。

「れ、恋奈様?なんか来たってばよ」
「全然音しないシ、アイツなにものだシ?」
「んん?どっかで見た覚えが・・・」

　真ん中のリーダーらしき女の両隣にいるデカい女と、やたら小さい少女が、恋奈と呼ばれた少女に尋ねる。
（ッチ、近場で見たのは初めてだが、あのバカが居るってことはこれが『江乃死魔』であ

れが片瀬恋奈か・・・やり合うのは得策じゃないか）

「なによアンタ、タイミング的に見て堅気には思えないけど・・・悪いけど、こっちは今勧誘の最中なのよね、消えてくれる？」

「・・・」

「・・だんまり、ね。まあ予定には無かったけど、増える分には悪くないわ。ここであったのが運のつき、光栄に思いなさい！この片瀬恋奈様の『江乃死魔』が１００の大台に乗ったこの夜に加われるのだから！」

「・・・お前のソレに興味はない、俺はそこのバカの一人が欲しいだけだ」

少女の自信と覇気に満ちたその言葉に、少年はネックウォーマーでくぐもった声で短く切り捨てた。

「あらら、簡単にスルーしてくれちゃって。あたしにはあんたの用事なんて関係ないわ！」

（そらそうだはな、これで通ったらクラシック風の不良なんてやってないはな。やっぱ

り即行でかたつけてバックれるのがベストだな）

「あれ、やっぱりあの声？でもバイクが違うし・・・」
「？どしたシ梓？」
「いえね、あのバイクのライダー知ってる気がしたんスけどね？違うといいな～、と思ったんスよ」
「もしかして、仲いい知り合いだシ？」
「とんでもないッス！むしろ、見かけたら全力で逃げ出したい相手ッスよ！」
「そんなに強いヤツなのかい？」
「強いのは間違いなく強いんすけど・・・正直あたしよりダメージの見極めギリギリにする人なうえに、やる事メチャクチャなんスよ・・・」
「メチャクチャ？」

　不良たちが身内で話し合っている隙に、少年はバイクのモードをエコからスポーツに切り替える。

「そうっスね、アズの知ってるあの人なら、多分この混乱している状況でさり気なく移動

できる状態にして・・・」

準備をしている少年も知らないことではあったが、後ろから猛スピードで近づいてくる女学生がいた。

「恐らく十メートルくらいあるんで、助走をつけて後輪浮かしてから」

ヤンキーがうるさく、音が聞こえないであろう事を予測して、足を地面につけたままアクセルを軽く開けて動き出す。

「ジャックナイフターンであそこの男ぶっ飛ばして、地面にタイヤついた瞬間そのまま即行逃げる！、って感じのことぐらい平気でするんじゃないっすかね？」

「ビンゴ♪」

「「へ？」」

一気に加速していつの間にか近づいていた少年は、当初の予定通り横に少し切ってそ

のままフロントブレーキをかけると、ＺｅｒｏＤＳの後輪はフワリと地面から離れた。
バイクは音が鳴る、特に不良のそれは、という意識を逆手にとって行われたそれはその場の誰もが反応する間もなく行われた。

「くらえ、俺のメット・・・トルナドの敵!!」

そこに居た誰もが、前輪を軸に男の顎に飛ぶように近づく後輪があたる、と思ったその時

「あは♪あたしも、それ頂き・・・くらえ、私の晩飯、肉まんの敵!!」

「「「「え?」」」」

瞬間追いついた女学生とバイクに乗った少年が、それぞれ海に人間を吹っ飛ばした。
その場の不良たち、バイクのライダーを含めて女学生以外の、全ての人間が呆然とした声をあげた。

湘南の夏が平穏に過ぎたことはない

和田塚真という男
朝の風景

「ふぁ～」

目が覚めると昨日のこともあり、眠かった俺はベッドで横になってダラケたまま思わずあくびをしてしまった。遮光カーテンの隙間から漏れる光が、眩しいが七時半を回ってはいないだろう。

ほんの二ヶ月ちょっと前までは、規則正しく朝早くから（毎朝五時！）起きる必要があったわけだけれども、今はそんなことは全く無い。

部屋を見渡せば、割と立派な部屋に散らかった細々としたものと、やたらと整頓された勉強机がある。遮光カーテンと本棚とベッド、押入れに机と椅子とカーペット（いい加減暑いのでそろそろしまう予定）。他には何も必要ない。

起き上がると寝巻きを脱ぎ捨てて、制服を着てそのまま人気の無い一階に降りる。

降りて、すぐ横のドアを開けた先にはリビングがある。白い壁紙に大型のテレビと、焦げ茶色のソファーが二つ。キッチンは引き戸を挟んで隣接しており、普段はめんどくさいので開けっ放しにしてある。

キッチンには一通りの調理器具と設備、そして前に住んでいた人物が何を考えて買っていったのかはしらないが残していった業務用冷蔵、冷凍庫の二つ。冷蔵庫から残り物を取り出してオニギリにする。

自分がずぼらなのがいけないのは分かっているが、正直スペースがいくらでもあると、どんどんモノが溜まっていって捨てる羽目になるので一人暮らしにこの大きさは勘弁して欲しい。

その分一人暮らしにはミニ炊飯器が非常に便利だ。なんでもとは言わないが小さいものは良い。

オニギリを三個ばかりかじりながらニュースを適当に流し、天気を確認しながらそんなアホなことを考えていると、そろそろ登校の時間になった。二階の部屋からカバンとセカンドバッグを取ってくると、何も言わずに鍵を閉めて家をでた。

そう、何を隠そう俺は今、治安の良い住宅街に二階建ての庭と車庫（しかもガレージ

！）付き一軒家で花の独身一人暮らしを満喫しているのだ!!

元々俺は前の学校を卒業したあと、一年ほど色々と忙しくしていた。就職先は決まっていたし、非正規とはいえ給料も出ていたわけで、それなりに良い生活をさせてもらっていた。

ここ1年は、一代でコングロマリット作って調子乗ってた九鬼の連中が、うちの市場を荒らそうとしていたのを叩きまくっていたので、結構忙しかったがそれも一段落ついた。

基本的に九鬼というのは乗っ取って、引き抜いて、人材を独占して、身内でなあなあしている企業で、中世の封建制度みたいなところがある。タチの悪いことに、ソコら中に愛人作って火種作ったり、ひとりの幹部にいくつもいくつも仕事を放任して、権力を高めさせている。

他にも、金に物を云わせていろいろゴリ押しする（いや、されるほうもそれなりに悪いけどね？）ところがあり、おまけにそのただでさえ強権の幹部が、他部署にまで口出しするのを黙認どころか推奨している節がある。

その集大成が、ついこの間あった川神市でのクソ騒乱騒動だ。なんだかしらんが、偉人のクローンに日本を統治させるとかいう、九鬼幹部主導の騒乱だ。さすがに中国の偉人だから外患誘致だ、とまでは云わないが（いやまあ、中国の武装政治結社であるところの「梁山泊」しか呼ばなかったのは、かろうじて残っていた理性じゃないかと思っている）、本人たちの主張はいい加減にして欲しいものだった。

多少気持ちはわからんでもないが、いつから日本はお前のものになったと問い詰めたくなった。

ついでにいうと、俺も九鬼を市場から追い出すチャンス！と現地入りした、というかさせられた。

騒乱罪、クローン禁止条約、破壊活動防止法、ｅｔｃ。あれだけテレビで大々的にやっておいて、案の定最終的には全部もみ消されたわけだが。

それでもいかに日本人が世事に疎いとは言え、あんなことやるコングロマリットだが、シンジゲートだか区別つかん連中には、治安維持とか無理だ！という風潮は流れ、警備、ロボット、軍事産業等からは大きく嫌遠され、今ではカバーカンパニーで誤魔化すことすら九鬼にはできなくなった。

・・・まあもう1年経っているということもあり、完全に忘れ去っている連中がいる

のも確かだし、藁にもすがる思いで融資を受けて乗っ取られている企業も存在している。

別段人間的には相当ぶっ飛んだ連中だが、悪い奴らではなかったが、一々主張がカンに触るし・・・ざまぁと感じるくらいには、個人的に嫌いだった。うん、他意は無いよ？

おかげでうちの会社も、本格的にダーティーな手段取る事もなく、すんなりいったのはよかった。かなりデカイ規模だが、株式上場してないという訳わかめな企業体質もあって、他の同業者より疲弊が少なく今のところ一人勝ち状態！

その上ホワイトナイトを二、三社やった結果として、前より手がより長くなってなんていうか・・・うははは、笑いが止まらない。

川神騒乱でボーナスも貰ったし、とても嬉しいというのが今の現状だ。色々不謹慎だが、九鬼サマサマである。

あ、ちなみにこの件があまりに大きかったせいか、流石に肯定派だった総理も庇いき

れなかったらしく、新たに企業犯罪対策班から独立して法務局の外局である「公安審査委員会」に「企業犯罪特別対策室強行犯係」が作られた。

・・・強行犯係ておまえ・・・。いわゆる警察の「二課」と揉めるかと思いきや、扱いは二課専属のＳＡＴのようなもの、むしろ「六機」と「一課特殊班」と揉めたそうだ。

しかし九鬼関連以外この強行犯係暇だろ、とか思っていたがそうでもないようで、この機にやってしまえとばかりに日本で警備業務についている、アメリカの民間軍事企業のブラックウォーターやロシア、中国のエネルギー関連企業が割を食ったようだ。これは九鬼以上にざまあだ。

この話は次の機会に置いておくとして、このときの功績もあって俺はいよいよ内定が確定したため、しばらく休暇を貰った。元々内定先に学力は全くと言って良いほど関係ないのだが・・・流石に最終学歴がアレ、というのも世間体が悪い。

そういうこともあり、そんなものは気にすることない！とかたくなに主張する最高幹部（ただの実力で勝ち取った家族経営）連中に断固として駄々をこねまくった俺は、ボーナスと一緒に取り敢えず有給、無給合わせて三年ほど休暇をゆすり取ることに俺は成功した。社長は泣いていたが、俺の知ったことではない。

正当な、権利として有給を獲得した俺は、どこか良いところはないかと叔父に相談したところ、叔父が卒業したという稲村学園を紹介されたわけだ。

叔父曰く、「とても活気があって、面白い学校だから」との事だったが、まさしくといったところで、俺の会社の商売柄拠点としていた埼玉とは違い、本当に活気があって良い学園だった。うん。

この一軒家も他人名義の叔父の持ち家で、たまに来る連中を手伝えばタダで使っていいと言われ、貸されたものだ。中身も、水道、ガス、電気周りとソファー、ベッド、カーテン、冷蔵庫、ラジオ、テレビ、机、椅子そして車以外なにも無かった。

仕方がないので、段々と必要な物を増やしていっているが、なにせ全て一人で運ばなければならず、依然として完璧とは言い難い状況が続いている。タンスぐらい容易しておけと。

「おはようございます!!」
「はい、おはようさん」
「おはようございます!」
「おう、おはようヒロ坊」

さて次はどんな家具を揃えようかなと考えていると、聞きなれた朝の挨拶が聞こえてきた。えーと、うん、そろそろ住宅街を抜けて海に出るから、センパイだろう。

すぐに見つかった長谷センパイに声をかけると、おはよう、わだくんと返事が返って来る。

この人は越してきて三ヶ月ちょいの俺の御近所さんで、姉と二人暮らしをしている長谷大センパイ。俺の1年センパイにあたる。

年齢は同じなんだが、めんどくさいのでその事については話してはいないが、疎遠ということではなく、結構頻繁に一緒に遊ぶ程度には中々親しい付き合いをさせてもらっている。

「センパイ、そのワダってのどうにかなりません?苗字誤解されるからあんまし好きじゃないんですけど・・・?」

「あはは、ごめんごめん。和田塚くんて言うとほら、咄嗟のとき噛みそうになるじゃない?姉ちゃんも一回噛んで痛がってたことがあるからさ」

「いやいやいや、わざとツスよね?!言いにくいならマコトって呼んでください、ってなん

ども言ってるじゃないっすか！・・・ってか長谷センセが噛む所とか、想像出来ないんですけど」

　この人は人畜無害を体現したような人物ではあるが、タマにぶっ飛んだ事を平気で言ったり、やったりするところが面白い。しかし、あのなんでも出来そうな長谷先生が俺の名前で噛む・・・？ちょっと以上に、見てみたいぞそれは。

「いつもは人畜無害だが、タマに後輩をイジメて悦に入る、稲村学園二年一組、長谷大とそのイジメられて悦に入る友人の、稲村学園1年三組、和田塚真」
「うん、あれで姉ちゃん、失敗すること多いからね」
「ホントですか？あんまり想像出来ないんですけど？」
「ホントホント、マコリンはまだ見たことないんだっけ？そろそろだと思うよ？」
「うわ、うわ！なにその新しい呼び方!!サブイボ出てくるんで、やめてくださいよ!!」
「・・・スルースキルは二人とも高い、と」

　この無視に対して若干しょぼくれている人は、長谷センパイのクラスメートの坂東太郎、通称ヴァン先輩。

「おはよう、ヴァン」
「おはようッス、ヴァン先輩」
「おはよう、ヒロ、真」

だいたい朝は、この三人で登校している。タマに委員長なる人物とも一緒になるので、四人になることもあるが、この三人が中々に面白い。
この長谷センパイが近所づきあいで親しくしている事もあり、学校でも俺と親しく付き合っている。えらくほんわかとしたこのセンパイは、面倒見が良く、色々な人に紹介してくれたり、休日に街を案内してくれたりした。お裾わけを持ってきてくれたり、バイクの部品店を探すのに付き合ってくれたりする。

ここまで来ると、逆に派閥のようなものへの取り込み（事実見ていると長谷センパイを起点とした人間関係が多いこと多いこと）を疑うべきなのだろうが、不思議な事に・・・俺の不良としての部分が、この人を信用するべきだと訴えかけてくる。
これは俺の中では、相当におもしろい出来事だ。

そしてヒロが言うなら、とあまり人付き合いの良くはないヴァン先輩も、俺とはそれなりに親しくしてくれている。

イケメンの上に、文武両道を地で行くこの人も、中々に面白い性格をしている。融通がきかなくて面白みが無いように見えて、常に人のことを真摯に観察しているという謎の二重構造をしている。なんにでも全力投球で、この前も分からなかった中国語のフレーズのために、会話教室に乗り込んで聞き出してきたらしい。

そんな学業バカかと思えばそうでもなく、始業式の始まる前の休みの間に知り合ったのだが、良くわからない基準で女性に恋に落ち、イタリア人もかくやという具合に恋愛劇を繰り広げ、そしてあっと言う間に冷めて元通りになっていた。ここだけ聞くと、訳が分からないかもしれないが、本当に訳が分からなくて面白い人だ。

「おはようございます！あ、このゴミ拾っておきますね？」

色々と喋りながら歩いていると、長谷センパイが昼寝？をしている学生の周りのゴミを片付けていた。

「あ、手伝いますよ」
「いいよいいよ、俺が好きでやってることだしね」
「・・・サンキュ」

俺たちがゴミをかたしていると、その女学生はボソリと一言だけ礼を言った。ん？しかしこの女、たまに見かけるけどどこか別の場所で見たような・・・。

「んだよ・・・。ジロジロ見てんじゃねえよ」
「あ、すいません」

中々の迫力におもわずたじろいでしまったが、この女結構ヤるようだ・・・というかやっぱり、どこかで最近あったような・・・？

「とっとといこうヒロ、真。それほど時間に余裕があるわけでもない」

ヴァン先輩ナイスフォロー！

「じゃあ行きますね」
「すんませんした」
「・・・・・・おう」

最低限の挨拶だけすますと、オレらはそそくさとその場を退散した。

「いや～中々の迫力でしたね～」
「あれ、委員長いつの間に！」

少し離れて三人で一息ついていると、ふいに声がかかった。

「いえ、つい先ほど見かけたので、声をかけようと思ったのですが、ちょっと近寄り難かったもので」
「あれは結構怖かったっすね、タマにこの辺で見かけますけど、どんな人なんですかね？」
「やめておて真、あれも「よからず」の一人だろう。関わっていいことなど無い」

「一応挨拶はサンキュって言ってくれたし、悪い人ではなさそうなんだけどね～」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

俺とヴァン先輩、委員長センパイは一様に皆押し黙る。

「み、みんなどうしたの？」
「・・・ヒロにかかれば、人類みな兄弟にでもなれそうだな」
「長谷君ですからね～」

これだからこの先輩は面白い。

しかし、委員長がかかわらずにすんで幸いだった、とイケメン発言をするヴァン先輩に若干イラッとしながら、なんとは無しに四人とも学校へと歩き出す。

「不良と言えばセンパイ、噂に聞いたんですけどセンパイ、辻堂センパイと・・・」

話題は先程の女学生から、稲村の番長こと辻堂愛と長谷センパイがペアを組む羽目になった話にシフトしていった。

なんにせよこのストレートの髪、きっちりと着込んだ制服にグルグル眼鏡の女性が委員長である。朝の通学で一緒になるメンバーの、最後のひとりだ。

え、他に説明はって？わははは、君面白い事を言うね。委員長は委員長じゃないか。

「うむ、まさにそのとおりだぞ真」

「ええ!?心の中読まないでくださいよ！」

「どうしたんですか？」

「ほっといて良いと思うよ、委員長」

「？・・・はあ」

その後も、よからずの事や、稲村の番長について話をしながら学園につくと、稲村の不良共が校門前に集まっていた。朝から嫌なものを見た、と不機嫌になるヴァン先輩を長谷センパイがなだめながら、学年の違う俺たちは下駄箱前で別れることになった。

「じゃあまた！」
「またッス」

こうして、俺の稲村学園での一日が始まっていく。

別れる前に、礼をしていないことを思い出し、ヴァン先輩さっきは助かりましたと言うと、さきほどイラっとしたことに少し後悔した。

「なに、友達のためだ」

とそう一言微笑みながら、そう返された・・・僕の友達は、心もエリートのようです。

昼の出来事

長谷センパイたちと別れるて教室につくと、俺の席である窓際の席に腰を下ろした。

「「「「おはようございます、愛さん!!!!」」」」

クラスで知り合いになった連中と話をしていると、外からエラく気合の入った挨拶が聞こえてきた。

二列に分かれて頭を下げているヤンキー共の間を、うっとおしそうに、しかし颯爽とあるいてくる人影が見える。

辻堂愛。彼女こそが、この湘南においてもっとも恐れられている、稲村学園の番長、『喧嘩狼』である。

別段よくイメージされるような、眉毛沿った不細工が、己の顔と家庭環境をはかなんでヤンキーをしているわけではなく、辻堂愛は美人である。

色を抜いて染めて、無造作に流しているだけの割にはばさつかない綺麗で長い髪。腰チェーンという奇抜なファッションでありながら、ワイルドなカッコよさすら醸し出す改造制服。まるでモデルのような、日本人離れしたスタイルと身長。そしてなによりも、彼女は無表情であろうが、怒りをあらわにしていようが、怒鳴り散らしていようがその美しさが損なわれない。こればかりは、化粧ではごまかせない本当の造形美を持った者の証拠である・・・というか、化粧すらしていないという説もあり、複数名の女生徒がその事実に絶望したとかなんとか。

いずれにせよ、この学園に入学してから聞いた話によると、彼女はこの学園に入学するやいなや並み居るヤンキー共をばったばったと倒し、わずか二日足らずでこの学園を手中に収めたらしい。

現在の辻堂軍団は３０人前後しかいないらしいが、腐っても湘南である。またこの稲村学園が湘南ヤンキー共のメッカであったらしく五十人以上潰し、彼女より上の学年は現在の一年より少しばかり人数が少ないらしい。

「ほら席につけ～、ホームルーム始めるぞ～」

教師が号令をかけるギリギリ前になって、校門前に整列していたやつらの幾人かが教室に入ってきた。ナンバー2をやってるとかいう葛西・・・？とかいうやつも同じクラスだが、どうやらバックれるようだ。

そういえば葛西といえば・・・俺は、辻堂愛自体には結構興味があるけど、辻堂軍団はあまり興味が無い。ただ単に、暴力に慣れただけのガキの集団だからだ。

ヤンキーなんていうのは暴力を振うのには慣れているが、振われるのには慣れていない烏合の衆でしかない。

それはともかくとして、俺も暴力をふるうのは大好きな方だからこそ、この番長にこの二ヶ月ちょっとのあいだ注目してきたわけだが・・・どうもこの辻堂軍団、少し妙な感覚がする。

具体的に何がどうこう、というわけではないが。何か妙な感じがする。当然辻堂愛とそれ以外の連中の力の差は歴然ではあるが、それ以上に、気のせいかもしれないが、温度が違う気がするように感じるのだ。

なぜとはしらないが、これは少し注意してみたほうが良いかもしれない、と観察を続けているが・・・その機会自体があまりない。まだまだ色々判断するには、様子を見る必要がありそうだ。

授業が始まると、それなりに講師の話を聞く。別段頭の良い方ではないし、勉強が好きというわけではないが、勉強はできる方だ。不良には勉強は必要ないが、俺は不良ではないので勉強はする。

よく「こんなもの将来役に立つの？」と耳にするけど、たたなかったのならその程度の仕事にしかありつけなかっただけじゃないか、と俺は思うんだけどな・・・すべての分野というわけではないけれど、ラーメン屋のおやじですら免許取るためには勉強が必要なわけで、最低でも新しい分野を勉強する方法は学校で学べるわけだし。

そもそも、ヤンキーなんかはアウトローなことに憧れてカラーギャングやらチーマーやらやってるわけなんだから、歴史とか面白いとか思わないのだろうか？相当にロックだと思うのだが。

たった二人の人間の敵討ちのために五千万人近くの人間が死に絶えたり、頭よさそうって理由で自国民十万人を虐殺したり、反吐が出そうなことなんてそこらじゅうに転がっている。

よっぱらった拍子に都市をまるごと焼いた、なんて話もあったなそういえば。

電車内でキングなのか牧師なのかどっちだよとか、ポルポトって響きかわいいよねと

か、言ってたバカがいたが（実話）頭蛆でも湧いてるんじゃないだろうか・・・そもそもだな・・・！

閑話休題

一人もんもんとどうでもいい事を考えながら授業を過ごしていると、昼休みになっていた。というか、いまだに日本では世界四大文明とかたわけたこと教えてるんだな・・・文明なんて川があれば、その隣にあるようなものだと俺は思うんだけどな。文科省推薦の、お偉い学者先生様の蜘蛛の巣のはった頭の中ではちが・・・おっと、これ以上はやばそうだ。

ま、まずいな。なんだかしらないが今日は少し油断すると脱線するし、思考が危険な方向にばっかり向いている気がする、少し頭を冷やしてこないとまずそうだ。

「お、どこいくんだ？」

「ああ、ちょっと飲み物買ってこようかな～って。お前もなんかいる？」

鈴木に引き留められた。こいつとはたまに一緒に飯を食う仲だ。
お調子者だが、結構顔の利くやつで色々面白い話を色々してくれる。女子ともそこそこ話をするそつのないやつだが・・・同時にクラスに一人はいる、悪ぶりたい年頃の男だ。
もっとも、面白いことにコイツの場合、望んで話すより何気なく話す人間関係のほうが危ない話だったりするあたり、悪ぶれない善性を象徴しているのかもしれない。

「買ってきてくれんの、マジで？じゃあ・・・」
「ヌパイラノレグレ一プな、わかった！」
「なんでだよ!!誰が飲めるんだよ、あんな歯磨き粉となにかのカオス!!」
「冗談だよ、ちゃんと買ってくるって」
「ほんとかよ・・・お前、なんか真顔でとんでもない事してきそうで嫌なんだよな・・・」

・・・こういうさりげなく人間観察に優れているところも、コイツの面白いところだ。

「じゃあ買ってくるは」

「頼むは、しかしこの学校、炭酸売ってるあたり相当ロックだよな・・・」

それは確かに。

「お、センパイじゃん」

階段を下りて自販機のあるあたりまで行くと、長谷センパイがいた。センパイ!と声をかけると、どうやら何にしようか迷っていたらしいセンパイがこっちに気が付き、いつものように微笑んだ。

「真、今朝ぶり。そっちも飲み物?」
「はい、ちょっと頼まれたのもあって」
「そっか」
「センパイは何にするんですか?」

迷ってるんだよね、と苦笑するセンパイ。一応先に選んでたわけで、遠慮して少し話しながら待っていたが・・・長い！というか、迷っているのも含めて時間を潰しているっぽいな・・・。

若干イラっとしながらも話をしていると、そんな感情が顔から漏れたのか先に買ってしまうよう言われてしまう、あらら。

それでもまあ遠慮はしたのだが、先に買っていいよと強く言われたので、迷いつつもとっとと目的の物を買ってしまう事にした。

「ふ～ん、紅茶に・・・め、〆ツコーノレ。なんでこんなもんあるんだろこの学校・・・」

「不思議ですよね～。あ、紅茶は僕のです」

「友達のは？」

「・・・やだな～、決まってるじゃないですか！」

結局何が欲しいか指定しませんでしたからね、これでも問題ないはずですと言うと、結構性格悪いね誠と、言いながら長谷センパイはひきつった表情をした。

銘柄指定しない方が悪いのだ、ふはははは！

「じゃあセンパイお先です」
「あ、うん。じゃあまた今度!」

まだそこで時間を潰すつもりらしく、そんなことを言いながら長谷センパイと俺は別れた。

少し行った廊下の角を曲がり際に、いかにもヤンキーな男と一緒に歩いてきた葛西とすれ違った。
授業はふけていたが、学校にはどうやらいたようだ。
別段なにごともなくすれ違ったため、そのまま教室に帰ろうと思ったが、なんとなく嫌な予感がする。
この先には自販機ぐらいしかないので、葛西達もそこに行くつもりだろう、問題はおそらく長谷センパイがまだそこにいること。
長谷センパイはヤンキーな感じもしないし、突っかかるタイプではないが・・・。

なんとなく気になって自販機前まで戻ってみると、案の定センパイがまだいた、それ

も葛西達と一緒に。

「・・何も取ろうっていうんじゃないんだ。ちょっと、貸してくれるだけでいいんだよ、な？」

「・・・・・・・」

「おい・・・なんかゆーたらどうや！」

「あっちゃー・・・絡まれてるし・・・」

どうやら葛西達がセンパイにタカっていて、それをセンパイが無言の拒否をしているようだ。

どう考えてもまずい状態、これは割って入るか・・・？

「あ、センパイまだいたんすか？」

「・・・真。うん、ちょっとね。真こそどうしたの？」

「いや～、頼まれてたの一本買い忘れちゃって！」

「そうなんだ・・・」

やっぱり少しは怖いのか、いつもより歯切れの悪いセンパイ。だがまったく引く気はなさそうだ。

いつも笑っているだけな印象のセンパイの、意外な一面を見た気がする。

頑固なのはわかっていたが、こういうところで自分を貫けるやつはなかなかいない。対戦型のスポーツや暴力に慣れていない奴では特に珍しい。そう考えると、平和主義者っぽいところのあるセンパイは、ビビッていはいるが相当に肝が据わってるほうだ。

「なんだお前、いまは俺らがコイツと話してんだよ!な、センパイ」

「・・・・・・」

「あ?んだよその態度は・・・」

「わいらは、ちいと小銭がたらんから貸してくれいうとるだけやろう。そんなに難しいことというとらへんとおもうんやけどなあ・・・」

「・・・」

「このやろ・・・!」

ビビりながらも、ただ何も言わず睨めつけるセンパイに業を煮やしたのか葛西がセンパイの襟をつかみあげた。

ってやばい！

「まあまあまあ、そんなカッカしなくてもいいじゃん！ほら、いくら足りないんだっけ？」

「おまえにゃかんけい・・・！」

「百円や」

暴力沙汰になられては引き返した意味が無い。攻撃的な感じにならないように割って入る。

激昂しかけた葛西と違って、男の方はとっとと金額を提示してきた。葛西がなにか怒鳴ろうとしたが、俺はかぶせるようにして男に百円を渡してしまう。

「おま・・・！「はいはい百円ね～」なめてんのかこの野郎！」

「せやかてこれ以上時間かけとっても愛はんに怒られてまうだけやろう」

「・・・!っち、とっとと買って行くぞ!」

どうやら辻堂愛のパシリで飲み物を買いに来ていたらしい。男の手から百円をひったくると、アフタヌーンな紅茶を選んでボタンを押した。

ガシャンと落ちてきたそれを拾い上げながら葛西は辻堂のことを思い出しているらしく、顔面が緩んで変顔を晒している・・・。俺と長谷センパイの事が完全に頭から消えてしまっているようだ。

「・・・なんかしっぽでも振りだしそうな感じだな」

思わずつぶやいた俺。確かに、と長谷センパイ。

「ん?なんか言ったか?」
「なんにも言ってません」
「??・・・まあいいや、愛さ~ん♪」
「・・・・・・」

葛西は予想以上に愉快な奴だったようだ・・・。
いずれにせよ、これでひと段落つきそうだ。目立たないように長谷センパイに「とっととずらかろう」、とアイコンタクトを送ると長谷センパイもうなずいた。

「おいクミ～、どんだけ時間かかってんだよ!」
「あ、愛さん!!」

「ジーザス、なんてタイミング。長谷センパイ呪われてるんじゃないですか?」
「あ～、今日の運勢は割と良かった気がするんだけどね～」

いざ逃げようと行動に移す前に騒動の張本人が現れてしまった。これはまずいかなと思ったが、話は割と予想外な展開に転んだ。
自販機の前に俺と長谷センパイがいることに気が付くと、辻堂はまだ仕舞えてない俺の財布と、センパイの葛西に掴まれてよれたシャツの襟をジッと見てからこう切り出した。

「まさかクミ・・・お前、あたしの用事をカツアゲしてすまそうとしたんじゃねえだろう

な・・・?」

なかなかに予想外な展開に少し唖然としていると、あれよあれよという間に事態が収束して俺の手元に百円が返ってきた。

借りただけだよ、と言いながらきまり悪そうに立ち去って行く葛西達と、すまんなと一声かけてから去っていく辻堂をポカンとしながら見送る。

するとどこからともなくヴァン先輩が現れて、俺と長谷センパイをねぎらってくれた。どっから湧いて出た!?と驚いたが、どうやら俺が来た方向とは逆からこっちに来て、途中からこの騒動を聞いていたらしい。

「大丈夫か、真?」

「・・・え?ああ、大丈夫ですよ先輩。別に何かされたわけでもないですし!」

「そうか・・・」

「それより長谷センパイも災難でしたね」

とそんなことを言いながら、少し話し合ってから解散することになった。去り際にセンパイが

「・・・正直ちょっと怖かったけど、辻堂さんて・・・そんなに悪い人じゃないのかな?」

と言っていたのが少し印象に残った。それをヴァン先輩がたしなめていたが・・・確かに今回はそうんなんだろうけれど、センパイってちょっと、その、いっちゃなんだけどチョロ過ぎないだろうか?いやまあ、それがセンパイの良いところでもあるんだけれども・・・。

「しかしなるほどね」

今回のことでなんとなく、辻堂軍団の温度差が分かった気がする。

結論を急ぐ必要はないが・・・たぶん辻堂軍団と辻堂愛との間には考え方に大きな差があるのではないか?俺は今回そう確信した。

「さて、それじゃあ疑問も解けかけてきたし、とっととこの劇薬を持っていくとしますか!」

そう気合いを入れると、気分よく俺は教室に帰って行った。

ヴァン先輩に隠れて見てたんですか？と尋ねると、俺と長谷センパイが絡まれてるのを見て助けに入ろうとしたところに辻堂が割って入っていったらしい。

目を見ると嘘をついているようにも見えないし、助けられなくてすまないと真摯な様子で謝られてしまった・・・う、疑ってしまったことにそこはかとない罪悪感が・・・。

放課後

辻堂愛の事が少し理解できた事に今日は割と満足した。
その日は誰かと話すこともそこそこに、とっとと学校を出てしまう。別段、誰かと遊びたい気分でもないし家に帰ってバイクに乗って遠出でもしたい気分だ。
しかし海道を行くならアメリカンのＨｏｎｄａ　Ｓｕｐｅｒ　Ｍａｇｎａで行きたいが、レストアから帰ってきていないから断念せざるおえない。
別に今あるＺｅｒｏＤＳでもスーパーカブでも良いような気がするかもしれないが・・・いくら塞いでるとはいえ、電気車両を潮風のなか長時間ドライブというのもイヤな感じがするし、ましてやカブで長時間は苦痛以外の何者でもない！
痔になってもいいなら別だが、お勧めはしない。

というかメット壊されたばっかじゃん!!・・・鬱だ。

～～天上天下、愛が独尊だね～～♪

結局何をしようか考えながら歩いていると、不意に電話がかかってきた。

「お、誰からだ?・・・もしもし」

『あ、どもです』

ちょっと待つが名乗らない、どうやら知り合いのようだ。
どっかで声聞いたことあるような気はするんだが・・・。

「ん?・・・・・・・・ああ、梓か!」

『ひどいッス!!今素で自分の事わかんなかったッスね!?』

「ごめんごめん!ほら、電話だと若干声ってかわるじゃない?」

ほら、ＰＨＳなんかだとさ!俺はスマホだけど。

『・・・この前「俺の携帯は音質すげえんだぜ！」、とか言って自慢してましたよね？』
「・・・おお、声マネ結構うまいじゃん！」
『はぐらかしましたね？』
「かまけえこたあいいんだよ!!・・・で、何か用？」
『細かくないです～・・・ようってほどのモノでもないんですけど、真さん今日、明日って何か用事あります？』

ん、なんだコイツからデートの誘い？なわけないな。

「特にないけど？」
『（・・・っち）・・・あ、そうなんすか～』
「・・・・・・・・」

聞こえてないとか思ってんだろうな～。ということはなんだ、今日、明日あたり俺にこのあたりをうろつかれると困るということだろうか？こいつは江乃死魔にいるわけだから昼間は無いとして・・・夜か？

「なになに、デートにでも誘ってくれるの？」
『あはは、そんなわけないじゃないッスか！（でも本当に今回のは引っ掻き回されるとマズい、かといって引き留めるのにアズが抜けるのもマズい・・・八方ふさがりじゃねーッスか!!）』
「ふーん（なんか本格的にいてほしくなさそうだなおい）」
「じゃあデートじゃないけど、明日の昼間つきあってよ、家具選びたいんだけどお前なんだかんだで持ち物のセンスいいじゃない？手伝ってくんない？」
『アズがッスか？えー、ちょっとめんどうなんスけど（予定外だけど家具選びなら夜には解放されるだろうし配置で夜も忙しいハズ・・・ちょうどいい落としどころか？）』

　値段吊り上げようと交渉してきてるなこれは。あはは、さっきの舌打ちといいなんか勘違いしてるっぽいな。

「あはは、勘違いすんなよ。だれもお願いなんてしてねーんだよ」

「明日昼間開けろって言ってんだよ、わかったか」

『・・・わ、分かったッス・・・。（怖ええッス！マジ怖ええッス!!ああ、なんでこんな人と知り合う羽目になっちゃったんスか!!）』

そのすぐあとおびえた感じの梓は一言二言話すと、急いで通話を切ってきた。まあ、確かに出会い最悪に近かったからな～。

普通に出会ってたなら、もう少し違う関係もありだったかもしれないが・・・今の関係も俺はすこぶる気に入ってる。

一応今の会話で向こうの嫌がりそうな事もわかったし、様子見て嫌がらせするのも面白いかもな～。

しかしだからと言って、家具選びがウソなわけではない。実際、家の家具は色々と足りないものが多い。機能だけで選ぶならそれでいいんだが、できれば家くらいリラックスできる空間を演出したい。

俺のセンスで選んでも問題ないのだが・・・正直そこまでこだわる方でもないし、車

両ならいざしらず小物とかのセンスに自信があるわけでもない。
そこを行くと普段着などを見ていても、梓のセンスはなかなかのものだ。少々女物っぽくなるかもしれないが、その時は俺が微調整していけば問題ないだろう。ある意味、梓からの電話はタイミングがよかったかもしれないな。

そんなことを考えながら歩いていると、家の近くまで帰ってきた。冷蔵庫の中身と食べたいものが合致しなかった俺は、近場の「孝行」で惣菜を買って行くことにした。

「いらっしゃ・・・っげ!」

店先で売り子をしていたポニーテールの優しそうな店員が、こちらを見るとフリーズした。

「よう「総災天」!」
「ばか、やめろ!」

売り子はあわてたように店先に出てきた。

「なんのようだ！」
「今日は客だよ。唐揚げくれ、１００ｇな」
「なら客らしく来い！いちいち嫌がらせのような呼びかけをやめろ！」
「今ふと思ったんだけど「総災天」って「惣菜店」とかけてるの？」

もしそうなら結構センスわるくね？と聞くと、無視すんじゃねえよ、俺がつけたんじゃねえよ！、と半分キレながら唐揚げをつつんでくれた。

まったく、とかなんとかぶつくさ言いながらも追加の注文も慣れた手つきでくるんでくれているこの女性の名前は武田よい子という。

初めてあったのは、数年前に叔父と一緒に湘南まで釣りに来たとき（駅前でエサ買って観光センター近くで）だった。
なんでも当時のリーダーだった人が「湘南最強だぜベイベー！とか言ってみろ」、と無茶振りをしたらしく、けなげに「湘南ＢＡＢＹＳ」なるヤンキー集団を作って近場を暴

れまわっていたそうだ。
　そのときに運悪く、湘南ベイビーズのうちの一人が十五センチほどのサメを釣ってバケツにいれ、初めて生でみたサメにはしゃぎながら歩いていた俺とぶつかりサメを海に落としてしまったのだ。
　いま考えると少々大人げなかったと思わなくもないが、まだ幼かった俺は盛大にキレた。後先考えずに５０人からなるそのヤンキー集団に、バケツを持って突撃した。
　さすがに、真夏の海で初めての釣りをして体力を消耗していた体の出来きっていなかった当時の俺一人で５０人はきつかっただろうが、相手に運の悪いことにその時は叔父もいた。
　文字通り、千切っては投げ千切っては投げの大立ち回りを演じた末に、全員を地に下し、そいつらにサメを釣るまで延々と魚を釣らせた。
　サメが釣れるまでに結構釣った雑魚はどうしようもないので、その場で油で揚げて全員で食った。なかなかに良い想いでだと・・・俺は思っているが向こうのことはしらない。
　俺はなんだかんだで楽しかったし、最後はビビりながらも連中も魚を食った後は夜の浜辺で花火をしながら一緒にはしゃいだ覚えがあるし、楽しかったんではないだろうか？楽しかったはずさ、うん。

なんにしろ、湘南ベイビーズとはそれ以来の付き合いなので、個人的にはベイビーズはそんなに嫌いではない。

「そういえば調子はどうよ、現湘南ナンバーワンさん」

「だからやめろって!!」

器用に小声でどなるよい子。家の人にはヤンキーやってることは内緒にしているので、気が気でない様子。まあだからこそ、からかうためにワザとやっているのだが。

「はあ、言っても無駄か。で、調子だったな・・・正直あんまりよくないな」

「あれ、結構弱気だね？」

「そうだな、湘南のトップとったときにちょっと気が抜けたっていうのもある。一応、リーダーの言ってたことをやってのけたわけだからな。しかしそれ以上に・・・」

・・・三大天の実力が抜きんでているのだろうな。

「わかってるなら言うなよ。マキ・・・腰越は単体で最恐だし、辻堂もはんぱじゃない。

片瀬はそういった意味では二人には及ばないが、計算高さとカリスマがある」

腰越とかいうやつのことは知らないが、辻堂はなかなかのものだ。まだ人間性自体はあまりよくは知らないが、一度そのケンカを見たことがある。あれはよい子程度に太刀打ちできるものではなかった。

片瀬は俺の嫌いな感じではあるが、その実力はなかなかのものだ。梓を配下につけているという一点もすごいが、女手一人で百人近くを規律を守らせたうえでまとめ上げるというのは、かなりのやり手とみて間違いない。片瀬財閥の人間でなければ、うちの会社にスカウトしていただろうに・・・惜しい人材だ。

そうとはわかっていたが、あえて色々突っ込んで聞いてみた。それは俺が意外によい子の湘南ベイビーズの事を気に入ってるのかもしれないし、あるいはそうでない理由からかもしれない。正直自分でもよくわかっていない。

「自分から負ける気なんてさらさらないが・・・これからは三大天の時代なのかもな」

よい子・・・総災天のリョウはそう言うと悲しげに、しかし少し誇らしげにため息を一つ吐いて俺につり銭と品物を渡した。

その後ろ姿に、俺はひとつの駆け抜けるような青春の終わりを感じた。

ある日の出来事　Ⅰ

翌日は当然学校をさぼった。

成績は「まったく」悪くないので、たまにサボるくらい内申点が多少下がるくらいでどうという事は無い。

稲村学園に入学してからも何度かサボったし、後遺症に対する病院の診察（もちろん真っ赤なデマだ！）があるのだと口裏を合わせてもらっている。だから正確には、さぼりにすらなっていない。病院も、うちの会社が懇意にしているところだから、診断書もフリーハンドで書いてもらえる。

そんなこんなで、待ち合わせの十一時半に間に合うように家を出た。

六月も終わりに近づいてきて、そろそろ最高気温が２５度を超える。その割に夕方になると、ちょっと寒すぎないか？と言いたくなるくらい涼しくなる。一番中途半端な時期だと俺は思う。

こんな時こそ、昼間は風を切ってバイクで出かけたい！が、家具買いに二人で行くわけだから、そんなわけにもいかない・・・。

むろん、家具自体は宅配で送る。そのうえで日にちをずらし、だんだんと着くようにするから、運ぶ点は問題ないんだが（たぶん梓はこの点を忘れてるんじゃないかな～）・・・。

梓はいつも通りの制服で来るだろうからケツに乗せられないのだ。

車高が高いので、スカートでは横乗りでもＺｅｒｏＤＳは危なくて乗れない。

ああ、ちくしょうズボンにさせておくんだった！そうすりゃ、七浜まで行ってアウトレットの家具店に行って終わりだったのに・・・。

ぶつぶつ言いながらも歩いていると、駅についた。

この駅は海岸沿いにあるのだが、住宅地側は急な下り坂になっている。そのため、利用者はどうあっても坂を使わなければならない、めんどくさい場所なのだ！

ホームは吹きさらしなので、景色、特に夕日に沈む江ノ島は最高かもしれない・・・のだが雨の日にちょっとでも風が吹くと最悪なことになる、台風の日なんて最悪なことになる、なんとも微妙な作りとなっている。ホームにいるのも最悪だが、電車通学なのに

肝心の電車が動かない。
オレ的には呆れるほどやってらんない駅なのだ！
そして残念なことに稲村学園の最寄駅である・・・稲村学園、一人暮らしには厳しい学園である。

あ、景色は良いかもしれないけど、電線を埋めてないから写真を撮るのにも向いていないかもしれない。やっぱり微妙だ。

「おまたせしました～」

しばらくボケっと海を見ていると、梓がやってきた。

「おう」
「相変わらず、時間五分前にはぴったしッスね、真さん」
「まあな」

携帯が普及しだしてから、私生活で平気で遅れてくる人間が多くなった。俺はそうい

うのは気に食わないタイプだ。
一分一秒にごちゃごちゃ言う「日本人らしさ」も大概アホ臭いと思うが、いつもいつも一時間くらい平気で遅れてくるような奴は、殴られても仕方ないとは思う。
そんな俺だから、梓も遅刻してこない。

「というかやっぱり制服か。梓オマエな～・・・せめて私服で来いよ」
「しょうがないじゃないッスか～、夕方は江乃死魔の集まりあるから私服じゃダメなんッスよ！というか陸上王国由比ヶ浜の制服ッスよ？着て来て気に入らないの、誠さんが初めてッスよ！かわいいからいいとか思わないんすか!?」
「・・・めんどくせーやつだな」
「酷いッス!!」

俺は当然、私服で来ている。
上等なフレンチリネンを使った、グレーブルーのＶネックの七分袖ニット。タンカラーの夏用カーゴを少し裾をまくって、黒のスニーカーソックスと、ちょっとごつい感じのする茶色いアクティブな革靴。右手首の内側に文字盤が来るように巻いた、全体的に黒で文字盤に数字のないシックな腕時計。ネックレスは、うっとおしいのでつけない

ことにしている。やはり着るからには着心地の良いものが着たい。ボーナス入ったんだし。

全体的に、ちょっと早めに夏を意識したコーデで、克着やすさも考えている今風カジュアルといったところだろうか?ちょっと色づけに、愛用しているＭｏｌｌｅポーチをごつい軍用ベルトを肩紐代わりにしてバッグのように使っている。

なぜ私服が当然なのかというと、俺の制服がドノーマルだからだ。

改造制服でもないやつが、昼間から出歩いていればどうなるか。

それほどスレていない日本のお巡りさんが「やあどこ行くの?ちょっとお茶でもおごってあげよう!」と、日本では少ないモノホンの拳銃が合法的に見れる場所へご招待してくれることは想像に難くないだろう。

好き好んで、そんなところへ行きたがるやつは、そうはないだろう。少なくとも俺は喜ばない。

あと、時計が利き腕の女性巻きなのは防衛上の問題だ。

「しかし真さん、服のセンス悪くないですよね～、落ち着いた感じはしますけど」

そして今のコーデだと、シックな感じに落ち着いているから、高校生には見られない。大学生が昼間から外をうろついていても、よほど怪しくなければまず補導を受けることはない。

「一緒に歩いてるの見られると、結構評判いいんですよ?」

当たり前だろうが!そっちは狙ってやってんだよ!!

・・・もう一つ、俺が私服でそれなりに着飾っている理由がこいつだ。

梓は見た目がいい。そして俺はそうでもない。

あまりにもパッとしない恰好をしていると、ナンパしてくるやつがいるのだ!

気持ちはわかる。湘南は割と開放的な空気を持つ土地であるし、そこが気に入ってるんだが・・・解放感ゆえにナンパ師のようなやつも多い。

そこにいい女をつれた冴えない男がいれば、いっちょ追い払って自分が良い目を見よう!そんな事を考える奴が比較的このあたりには多いのだ、特に夏間近になってくるほ

どに・・・いや、割と年中いるか・・・。

なんにせよ、そういう輩は、少し人気のないところで「お話し」をすればすぐに相互理解を深める事はできる。しかし、そういう阿呆にいちいち絡まれて、時間を浪費するのは御免こうむりたい。

結果、それなりに私服にも気を使う羽目になったのだ。

本音を言えば、もっとミリタリーな感じの方が好みだ。しかしそれだとオタクっぽくみえたり、違う意味でおまわりさんに目をつけられたり（美少女＋ミリオタ＝犯罪臭しかしない）するので、こいつと出かける際は極力カジュアルなコーデを心がけている。

「それで、真さんは今日は何買うんですか?」

「今日は食器、テーブル、椅子、座布団、客用のベッドとかが買いたいんだよ」

「ああ、この前お邪魔した時紙コップに紙皿しか無かったですもんね・・・さすがにあれはアズもどん引いたッス」

箸すらコンビニの割り箸でしたもんね、と呆れたまなざしでこっちを見る梓。

仕方ないだろ、一人じゃ食器類は買いにくいんだよ！
地味に嵩張るし、収納考えなきゃいけないのもダルい。かと言って無いと困るが、料理を自分でしないならすぐに必要なわけでもない。
いずれ困るのは分かってるが、そのめんどくささ故に、なんとなくずるずると買いに行くのが遅れてしまう。結果、うちではいまだに紙コップと紙皿が使われている。
極論を言ってしまえば、割り箸一本あればいいような・・・いや、それは日本人としてどうなんだろうか・・・？

「まあ、割とセンス問われますからね～」
「俺としては、割れないから収納性の良さそうな、シリコン食器とか良い気がするんだがな。カラフルでお洒落だけど、この前登山用品店でも見かけたし、信頼性も高いんじゃないか？」
「・・・・・・・」

通販番組なんかを見ると、電子レンジにも入れられるし、便利だと個人的には思う。
実家で皿を電子レンジにかけたときに、バチバチと鳴りだしたときは本当に焦った。金属製品がダメなことくらい知っていたが、陶磁器の金属彩色がダメだなんて普通考慮

しないだろう!!

「・・・・・・・・・・・」

・・・ふと梓が黙り込んでいる事に気が付く。

オマエはどう思うんだと隣を目線をやると、呆れとそして何とも言えない冷たい眼差しで、梓がこっちを見ていた。

さ、さっきの呆れた目より視線が酷くなってやがる・・・だと!え、さっきは服装センス結構ほめられた気がしたんだけど・・・?

なぜそんな目をされているのか、さっぱりわからない。

俺が、若干焦りながら言葉を探していると「ハァ・・・」と諦めたようにため息をされてしまった。

「・・・よし、そういうことならこのアズにお任せッス!!」

「ど、どうした急に」

「真さんにセンスのかけらも無いってことが判明したので、アズがすべて決めます」

「かけらも・・・?!し、シリコン食器の何が悪いんだよ!」

ほんとに判らないの?このグズ。
そんな言葉にされていない意思を、俺は視線から感じ取った。いつもの俺にビビっていた雰囲気が、今の梓からは微塵も感じられない。

「言っておきますが、真さんみたいな人にシリコン食器は無理です」

食器が問題なんじゃなくて、俺が問題なのか!?
そう突っ込むと、嘲るように鼻で笑われた。

「もう一度言わないとダメッスか?シリコン食器みたいにカラフルで、お洒落な食器は真さんには不可能です」
「・・・」
「ああいうのはもっと、今風でカジュアルなタイプの、もっとマメな人用です。間違ってもバイクを複数台持っていて、車庫にはオイルピットまで自作し、たまに会うときエンジンオイル臭かったり、その同じ車庫にサンドバッグやら得体のしれない工作台やらを所せましと置いているような、チャラさのかけらも無い、汗臭い人用ではありません。」

「あ、汗臭い・・・」

梓の口撃が止まらない。

「あれは意外と干す時に気を使うもので、生乾きでも折りたたんで適当にほっぽっときそうな真さんでは即ダメにします。断言しても良い」

「・・・・・・・」

なんか口調が・・・あれが奴の素か・・・？

「じゃあとっとと行きましょうか？」

「・・・はい」

そんなことは（たぶんきっと）しないし、車庫にピットとか設置してあることのどこが悪いんだ！そう思いながらも何故かなにも言い返せなかった。